

夕空に歌へる

コリーナ町人

はてもなく廣い夕空ではなしか
花の香りに満ちた
さはやかな微笑のかげに
涙ぐむらし夕ぐれの鐘
あまりに静かな一日の終りだと
ふと身につまされた私の心
搖れて來る晩鐘のやはらかさ！
思ふもなく手指を、んで
おん母よ、おん母よ
あはれみ深きヴィイリゼンマリア
くちづさむ諱謙と感激の一瞬間
はてもなく廣い夕空ではないか
地平にかたむく落陽は、
ぱつと開いたダリアの感じ
東から西へ、
ドガの踊り子のやうな身軽さで
透明なガラスの空を
ぐるりと廻つた目輪の頬は
休憩前の満足と喜悦に輝いて
見よ！
万葉はひそかなる光りの前に
しづかなる祈りをいのち。
はてもなく廣い夕空ではないか
心のそこまでしみ通る微光は、
愛慾に燃えるみだらな私の心を
けがれない微笑と幸福でかざる。
私の心は淨化された春の流の様
愛らしい夕空を仰ぎ見ては
香りの好いエーテルのさ搖らぎ
なつかしむ。
はてもなく廣い夕空のたましい
私の心は目禮をとり交はす。
はともなく廣い夕空ではなしか
ほのかなるあかるさに包まれて
ありやなしや葉を搖るバルメイ
私は冷たい清楚な樹幹に依つて
何か知ら？獨り遠きを思ふ。
アーヴェマリアの鐘が搖れ渡る
無心なバルメイラは
か弱い緑の葉をゆすつて
夕暮の小唄をくちづさむ。
ときには悲みに満ちた挽歌の如
きには感激に躍る行進曲の如
はともなく廣い夕空のもとに
なつかしいバルメイラの交響樂
はともなく廣い夕空ではないか
輕蔑と呪咀と憎惡に冷笑する
私の心は
微光の白い両手とバルメイラの
歌と共に愛撫されて
搖籃に眠る幼兒のやうに

なんこまえ、静かなひてあもう
私の心は小い喜びの花束に飾ら
聖母よ、聖母よ
あはれみ深きヴィルゼン、マリ
かくて幻想に暮れて行く
夕べの空

泡影氏におくる

なやみ 夕美

来たる日も又來る日もうろに
いのちのうごき此のごろは見ず
事一つ吾にそはずかもひたひた
生きを追ひゆく若き日かな
○懲しき夕べとなれば故郷こひし
を思へばたえられなく
○慾欲らすをこもはらずたゞひ
・日安き日こそと思へどすべなし
○なされすべせんすべ今は極まり
むだしきころ抱きてありぬ
○佛たち慈悲の手を垂れ空蟬のし
のいのちを召せぞぞ頼ふ

●**日伯俳壇**

●**トランスバトル俳句會**

■**清 水**

素麺の一筋沈む清水かな 二三
谷清水疲れて休む芝生哉 観
岩間より傳ふ清水や苔のむす静
清水掬む小道傳へや畠中 信
石焼けて三坪の庭の暑さかな露
そよ風に暑さ忘るそ青葉蔭 信
大椰子に油蟬なき暑さ増す 旭
較張の外に蟬のうなり聞くむし
き 東有

雨薄く草のねむりや暑さ増す二三
■**晝寝**

球を放て幼兒眠り入る真書哉天
富士見えて晝寝の客を覺ましけ
初訪問晝寝最中の受言葉 二三
柄の抜し鍼置き去りの晝寝哉天
試験すみ晝寝の夢や發表口 旭
撤水の臭ひ流るゝ夕涼み 信山
蟻二三大樹の下の晝寝かな 信山
初螢田植え歸りの子の土産 東有
湯に浸り雨後の茂りや山の宿露雲
明り消して月の出を持つ涼哉東
宮居ます茂る林に風薰る 二三
闇の間の一尺消えて行く螢

ア れ！ 深淵に光る螢や影二
着上人忍び涼み伏見町 二葉
四五人か草履み名々螢狩 、坊
盛追ふて野づぼり中に落ちにけり
曉の靄より明けて茂りかな 天馬
圓即題一蝶 東義
一しきり鳴て舞ひけり壁の蝶信山
裏山に日暮し鳴て日の落ちる蝶
山暮ふ里の灯見えて蝶ぬ雨 露夜
蝶時雨若葉の森の芋陽がな 天馬
蝶の音の日比谷の芝生に見え聞ゆ
静波

サン・ドス市 ブラツサ、デ、ジ
ゼーボニフアシオ五十
日光館 榮門松
向き 荷地
住宅、ガソリノ付して特に
作向きの耕作された土地を好
く貸します。委細は下記
御照會下さい。
聖市リベイロ・バダロ街
十二番四階
Alvaro Castello
Rua Libero Badaro, 12
3 andar S. Paulo

斷想

舊住人

聖州雜記

馬骨

(二)

馬骨

生れたいと思つて生れて来たのではないのに、さて生れて見るこそその生に限りない執着を持つ。生きるため働くを知り乍つとも遊んで食つて娘を見るが馬鹿らしく又苦痛である。遊んで居ないが生きて行かねばならぬ。生にながつたらと思ふても後の祭りである。だから働くのである。

結婚がたつず幸福を疑ふ。妻は夫は、結局自分自身ではない。愛にだけ絶対許すならともかく夫婦はずり二人の夫格である。自分の心にさへ悩まされる人間だ。結婚に微笑ぐる人々は皆微笑美にあきらめて居る。教會の鐘をきく毎に結婚に亡び行く人たちを愍む。

私達は不思議な解剖することも出来ないやうな病を受けて居る。この多愁なそして不満いふ病を。この變な病のためにざれ程華やかさが失はれ英氣を殺され淋しさを増すことが。

人の家を捨て自然の殿堂に参し、自然の心に融合し得る者は無上に幸福だ。この巧妙神祕な自然のきさしに跪座し合掌せばそこに淋しさも薄らぎ、胸も消え、呪もなく、悶も和らぐであらう。然し私にはこれまでやかな苦悽心がどうしても湧かないのを悲しむ。

世の中に若し女がなかつたならばそれは全く馬鹿氣切つた旨但だがそれこそ酒飲みが禁酒法案を見せつけられる以上にうらたえる事であらう。氣候が寒くなると工場の白い煙が半常より温かに見える、斯した感覺がある。人間界の事を凡て化學的に解決するなどしたるものだらう。

列車は進む、珊瑚色に澄みほつと空一狹い山脈と山脈の間に紫帶びた雲が深ふ、放牧り群が美しい小川のふらを、緑の牧場に悠かに廻んで品ひ一急に市に集中されし優游外國を奴を見るが馬鹿らしくて行かねばならぬ。生にながつたらと思ふても後の祭りである。だから働くのである。

列車は進む、珊瑚色に澄みほつと空一狹い山脈と山脈の間に紫帶びた雲が深ふ、放牧り群が美しい小川のふらを、緑の牧場に悠かに廻んで品ひ一急に市に集中されし優游外國を奴を見るが馬鹿らしくて行かねばならぬ。生にながつたらと思ふても後の祭りである。だから働くのである。

ラエス・マートグーフ、パラナの北部に至る諸鐵道を駆逐する、鐵道や信号機などを總て英國式に割り鐵道を採用せし先見の明は歎服に感する、一年間に往来する客數六万内外、交通は忙んだ。

馬骨

（二）

馬骨

ラエス・マートグーフ、パラナの北部に至る諸鐵道を駆逐する、鐵道や信号機などを總て英國式に割り鐵道を採用せし先見の明は歎服に感する、一年間に往來する客數六万内外、交通は忙んだ。

馬骨

